

描画を眺める際における 熟練者の主観的体験に関する研究

—— 黒 - 色彩樹木画テストを通して ——

植 田 愛 美

〔抄 録〕

本研究は、描画法として黒 - 色彩樹木画テストの理解をより深めることを目的に、“描画療法・描画テスト熟練者”の視点に焦点が当てられた。データの分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチが採用され、熟練者（以下 Th.）の語りをもとにモデル化された結果、黒 - 色彩樹木画を眺める上では、Th. が【描画を読み取るための探索過程】、【黒 - 色彩樹木画における共通理解の観点】といった、大きく2つのプロセスを体験していくことが考えられた。特に【黒 - 色彩樹木画における共通理解の観点】では、Th. の《描画についての捉え方》《2枚法だからこその解釈》《Th. が期待する修正描画体験》のプロセスを辿ることによって、Th. の視点に影響を与え、描画イメージや解釈がさらに深まっていくと考えられた。

キーワード：黒 - 色彩樹木画テスト、M-GTA、熟練者の主観的体験

I 問 題

1. 黒 - 色彩樹木画テストについて

樹木画テストでは従来と違ったいくつかの変法も見られている（中井, 1985；中園, 1996；角野, 2004）。その中の一つとして黒 - 色彩バウムテスト（以下、黒 - 色彩樹木画テストとする）が存在する。黒 - 色彩樹木画テストとは、Fodor & Kendel によって 1966 年に考案され、日本では名島らによって 1974 年に導入されている。この描画法は、まず鉛筆によって黒色樹木画を描き、その後に色鉛筆（12 色）で新たに色彩樹木画を描く技法である。名島（1996）は、樹木画テストに色彩を導入することで、色彩と密接な関係を有している感情・情動を把握しやすくなること、外界（他者）からの情緒刺激に対する応答可能性の高低を判断できることを述べている。村田他（2001）は黒 - 色樹木画テストにおける、黒色樹木画と色彩樹木画の描画順

序の研究によると、どちらを先に描くかという順序は関係なく、色彩による効果のみを問題にできることが明らかになったことを述べている。さらに黒－色彩樹木画テストに関して、名島・増田は心理アセスメントハンドブック（1993）の中で、現実検討能力と関連があるとされる色の不自然な使用（逸脱色）が統合失調症患者に多いことを示唆している。そして名島（1999）は、この黒－色彩樹木画テストに幾つかの解釈の視点を導入しており、「2枚のバウムはそれぞれ単独でも解釈できないことはないが、やはり2枚を比較検討することがきわめて重要である」と指摘している。ただし、高橋・高橋（2010）が述べるように、描画テストの解釈において大切な留意点は、まずは描かれた絵そのものをじっくり眺めるという姿勢であり、その上で描画の手がかり（細部）に注目していくことだと思われる。そのような心がけは黒－色彩樹木画テストにおいても同様と思われ、黒－色彩樹木画を眺める上でも欠かせない視点だと考えられる。

2. 樹木画テストにおける全体的印象について

樹木画テスト（バウムテスト）とは、投映法的一种であり、クライアントの内的世界を映し出す表現技法の一つである。この樹木画テストは、心理アセスメントにおけるテストバッテリーではもちろん、心理療法の中でも取り入れられており、数多くの臨床場面で活用されている。

樹木画テストに限らず、すべての描画法では様々な解釈の視点が存在するが、樹木画テストを解釈する際の重要なこととして Bolander（1977, 高橋訳 1999）は、まず「木を全体として眺めること」を述べ、この最初の段階について「直感的熟視の段階」であると称している。そのため、最初の段階ですぐに領域の分析を始めたり、特殊なサインに注目しすぎてはいけないことを指摘しており、まずは絵のトーンを知覚し、被検者の精神状態に「入って考えよう」と試みることを推奨している。また Koch（1957, 岸本他訳 2010）も先入観を持たずに心にしっかりと刻み付け、じっくりと見つめることを勧めている。さらに高橋・高橋（2010）は樹木画を解釈するには全体的評価から始めることを指摘し、全体的評価では、何がどのように描かれているのかという樹木画の内容面を眺めるのではなく、「絵が上手か下手かという美的判断を行わないで、直感的印象によって描画の印象を捉えねばならない」ことを述べている。さらに、この直感的印象や全体的印象を踏まえて「描画を眺める視点」は他の研究でも指摘されている。例えば、渡部・土屋（1995）は、樹木画の印象的評価における特徴について、SD法や質問紙（MAS, エゴグラム, EPPS 性格検査）、TAT を用いて、樹木画の専門的知識を持たない非専門家を対象に調査を行った。その結果、非専門家による直感的印象が、人物への印象や統計分析の内容との矛盾は見られないことを明らかにしている。他にも青木（1980）では描画の解釈の多くは多義的であるため、全体的印象に基づいてより適切な解釈仮説を拾っていく必要があることを述べ、描画のみで臨床群（統合失調症者・神経症）か健常群かの判断を

求めた研究を行っている。このように、被検者が描いた描画を直感的・全体的印象によって捉えることは、Bolander (1977, 高橋訳 1999) や高橋・高橋 (2010) のみならず、多くの研究者が重要としている視点である。

3. 描画法における主観的体験について

前述の全体的印象の他にも、描く・眺めるという内的体験そのものを重視し、主観的体験として描画を捉える研究も存在している。大石・成瀬 (2012) は信頼性・妥当性に関する検討に課題を残していると指摘した上で、描画過程や描画行為は、身体性 (身体感覚) と運動性 (動きの知覚) を通して、描き手に心理的な体験を喚起することを述べている。加えて、野口ら (2016) は、描画による表現行為は、描き手にカタルシスや自己洞察を与える効果をもっているが、それ以上に、描画を媒介にした描き手と見守り手との関係が大切となり、描き手の主観的な意味に接近するには、描画後の質問や対話が重要であることも述べている。また藤中 (2008) は、バウムテストを使用した2つの事例を提示し、描かれた絵や描画行動について描き手と話し合うことで、自己理解や自身が抱える葛藤に気づくことができたことを述べている。近藤 (2012) では、2年間継続して実施したS-HTPP法を用いた描き手との振り返り面接を行っている。その面接過程で、描き手は複数枚の描画表現の変化に主観的な意味づけを行い、それらは自身の内的外的変化と対応していることを描き手が語っている。さらに近藤 (2016) は、バウム法、S-HTPP法、風景構成法を用いた描き手の主観的体験に注目した研究を行っている。それらの描画を同一の被検者に実施した結果、描画空間への関わり方にはイメージ、バランス、現実を主体とする3種類に分類している。そして描画過程には、様々な性質をもったプロセスが循環的に繰り返されること、またS-HTPP法、風景構成法という複数のアイテムを用いての構成は、描き手の初めのイメージとは異なりイメージへと自律的に動いていくことを示唆している。上記の先行研究は、あくまで描き手に焦点を当てた主観的体験であり、描画の読み手に焦点を当てた研究は少ない。その中でも近藤 (2011) は、描画がどのように描かれたのかという描画過程と、描画中に描き手は何を体験したのかという描画体験として、検査者・セラピストが「描かれる絵」に注目する必要性を述べている。そのため、検査者・セラピスト自身の主観的体験にも注目することが、これまで事例研究や数量的な研究が中心であった黒 - 色彩樹木画テスト (名島, 1996; 名島, 1998) を、臨床場面で実践し、描画法としての理解をさらに進めていく上での、一つの手掛かりになると考えられる。

Ⅱ 目 的

本研究では、描画テスト・描画療法実施熟練者の主観的体験に焦点をあてることで、熟練者がどのようにして黒 - 色彩樹木画テストを眺めていくのかを検討していきたい。そして、描画

テスト・描画療法実施熟練者の体験を詳細に検討する方法として、木下（2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を採用し、熟練者の主観的体験について「語り」を元にモデル化をすることを目的とする。

Ⅲ 方 法

1. 研究協力者

心理臨床場面において、描画テスト・描画療法を実践し5～30年の経験を持つ臨床心理士（以下 Th.とする）6名。また、描画テスト・描画療法熟練者はいずれも医療現場や教育、福祉現場において、描画テストの実施あるいは心理療法過程で積極的に描画テストを用いている。

表1 本研究調査協力者一覧

調査協力者	A	B	C	D	E	F
描画法経験年数	8年	5年	10年	20年	30年	11年
職種領域	医療・福祉	医療	医療・教育	医療	医療・教育	医療
描画法の種類	バウム・風景構成法	バウム・人物画・風景構成法・スクイグル	バウム・風景構成法	バウム・風景構成法	バウム・風景構成法・HTP法・スクイグル	バウム・人物画・風景構成法・S-HTP・家族画・スクイグル
黒－色彩樹木画テスト実施経験の有無	無し	無し	無し	無し	無し	無し

2. 本調査で使った描画について

A 精神科病院, B 精神科病院において、植田（2013）が修士論文作成のため、大学院生時に調査で得た、統合失調症者と診断された男性3名の黒－色彩樹木画テスト、計6枚を用いた。この3名の描画は、植田（2013）によって得られた、全15名の統合失調症者から、無作為に抽出された描画を使用した（図1参照）。植田（2013）では、黒色樹木画テスト（鉛筆）から色彩樹木画テスト（色鉛筆）の順に実施をした。なお調査を施行する際は他者が入室することがなく、周りの音が聞こえにくい部屋で行い、A 病院でのみ、実施の際には臨床心理士に陪席して頂いた。黒－色彩樹木画テストの実施の際は、A4のケント紙を縦向きにそろえ、鉛筆（4B）、12色の色鉛筆、消しゴム、鉛筆削りを用意し一本の木を描いてもらった。その際の指示は、黒樹木画では「今から絵を描いてもらいます。これは絵の上手下手を調べるわけではありませんから、気楽な気持ちで描いて下さい。でも、できるだけ丁寧に描いて下さい。それでは木を一本描いて下さい」とした。色彩樹木画に移る際には、新たにA4のケント紙を用意した上で、「今度はここにある色鉛筆を使って、やはり木を一本描いて下さい。木はさっきと同じでも違った木でも構いませんので、思うように描いて下さい。色はどれを何色でも使って下さい。でも、できるだけ丁寧に描いて下さい」とした。指示については、調査者が被検者に口頭で伝え、指示後、黒－色彩樹木画テストを実施した。また実施中には被検者の様子を観察し、

木の描画方法、描画中の行動などを、調査者がメモに取って記録を行った。なお、色鉛筆の内訳は青、紫、赤、桃、橙、黄、黄緑、緑、水色、薄橙、黒、茶の12色であった。

また本研究で統合失調症者の描画を取り上げた理由としては、研究協力者の多くが医療現場で統合失調症者と関わっており、統合失調症者の描画に対して、統合失調症者の人格理解に関する語り及び、より臨床実践に基づいた視点の語りが得られると考えたからである。

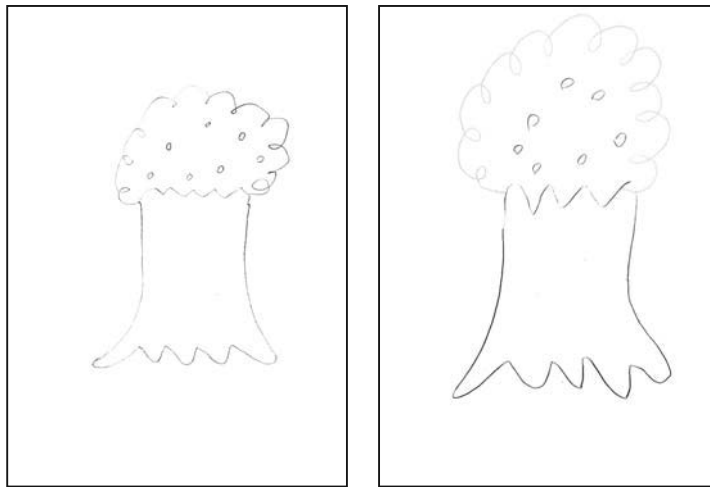


図1 本研究調査で用いた描画の一例（左：黒色樹木画、右：色彩樹木画）

3. データ収集方法

面接に際しては「研究趣旨」「誓約書」をもとに説明し、同意を得た上で行われた。2017年4月に筆者が研究協力者1名ずつに対して、プライバシーが守られた部屋で半構造化面接を行い、研究協力者の了承を得てICレコーダーで録音した。本調査で使用する描画は、すべて統合失調症者が描いた描画であることのみを伝えた上で、黒色樹木画と色彩樹木画を同時提示し、これから筆者がいくつか質問をさせてもらうこと、その上で描画を見て感じたことや思ったことを自由に語ってほしい旨を伝えてから実施した。半構造化面接で用いた質問項目は表2の通りである。なお、質問項目はTh.の描画における着目点についてのコメントが得られるよう筆者が自作したものである。この質問項目は、筆者と臨床実践20年以上の熟練者と共に有用と判断して作成した。

4. 分析手続き

収集した録音データを文字起こしして、筆録を作成した。インタビューデータから、Th.が黒-色彩樹木画テストをどのように眺め、解釈を深めていくのかという熟練者の視点を探索的に検討することが目的であったため、木下(2007)のM-GTAが適切であると判断した。さ

らに質的研究に精通した専門家のスーパーヴィジョンを受けながら、M-GTA の分析手順に則って分析ワークシートを作成した（分析ワークシートの例は表 2 を参照）。なお、分析ワークシートで記述されている、「定義」とは、データの解釈を論理的に表現したものであり、「ヴァリエーション」は、インタビューデータの具体例を指す。そして「理論的メモ」は、データ解釈の検討記録であり、その時の疑問やアイデアを記録する為にある。

表 2 半構造化面接で用いた質問項目の一覧

I 研究協力者自身についての質問
① 描画法での臨床経験年数を教えてください。
② 普段どのような場面で樹木画テストを使用することが多いですか。
③ 描画でクレヨンや色鉛筆を使用して、Cl.などに樹木画を描いてもらった経験はありますか。
II 黒・色彩樹木画を眺める際の視点についての質問
① 樹木画の全体的印象を教えてください。
② まず樹木画の、どこに・何に注目しますか。
③ この樹木画を描いた人を解釈する際には、どこに注目しますか。
④ これらの樹木画のどこに・どんな共通性を感じますか（相違点もあれば教えてください）。
⑤ 他に注目することがあれば教えてください。
III 最後の質問
⑥ 樹木画を見るときに大事にしていることは何ですか。

表 3 分析ワークシートの例

概念 3：自然色の使用
定義：描き手なりに考えて色彩を取り入れながら、色彩樹木画にも活かしているという Th. の捉え方
バリエーション（具体例）： ＊この方はけっこうそれぞれ、幹とか樹冠とか実とか…実なのかな？ 葉っぱかな？ でもこれ緑だから…深緑だから…に、それぞれこう…じゃあこの色使おうっていう…自分なりにこう考えてるので…なんか効果的にその人なりに、色を使えたんだらうなっていう印象ですね。うん。（P. 8, B さん） ＊この方はね、うん。うん。なんか、幹、この色、樹冠、これ、これっていう感じでね、すごい一対一で対応してて（P. 12, A さん） ＊要するに幹は茶色、樹冠は黄緑、っていうそれに現実に即した、色が用いられているかどうかっていうのは、こちら（色彩樹木画）で見れますね。（P. 8, E さん）
理論的メモ： ・描き手の中には色の影響や揺さぶりを受けずに、自分が使用したい色を色彩樹木画で自然に表現していく人もいる。色があることが表現の妨げにはならない。 ・色彩に注目する際には、どれだけ現実に即した色を使用できているのかという視点も必要ではないか。逸脱した色の使用（幹に緑など）が見られるか、見られないかで、Th. が抱く描画の印象や描き手のイメージが変わっていくことは予想される。

IV 結 果

分析の結果、概念は 24 個、大カテゴリーが 2 個、中カテゴリーが 6、小カテゴリーが 8 個抽出された。表 4 が概念とカテゴリーを整理した表、図 2 がそのモデル図である。以下、表 4 および図 1 にそってストーリーライン（分析結果を確認するために、生成した概念とカテゴ

表4 概念名およびカテゴリーの一覧表

カテゴリー			概 念 名	定 義
大	中	小		
描画を読み取るための探索過程	描画における違和感	木としての不自然さを受ける	1 不自然な第一印象を受ける	まず黒色彩樹木画を眺めた中で、木としての共通理解を抱きにくく、不自然さを感じる
			2 不自然さを黒色彩樹木画で捉える	黒色彩樹木画を眺めていく過程で、Th.が木としての共通理解を抱きにくく、不自然さを感じる
			3 木の表現について疑問を抱く	黒 - 色彩樹木画を眺めた際に、樹木の各部に対して、なぜこのような表現になったのかという疑問や違和感がTh.に生じること
	描画を読み取るための指標	各アイテムに着目する	4 描線に着目する	解釈する際に、Th.が描線の動きや変化に注目し描き手をイメージしていく様子
			5 枝に着目する	枝の表現に注目することで、描き手の状態・臨床像への手がかりとする
			6 根に着目する	樹木画を眺める際に、根の部分にも注目する動き
		樹種や表現方法に着目する	7 表現方法のワンパターンさを捉える	描き手による表現方法のワンパターンさに目を向け指摘すること
			8 樹種によって促進される連想	描かれた樹木の種類からも、Th.は連想を深めていき、描き手へのイメージに結びつけること
	専門家としての心がけること	描画指標を重視すること	9 バランスを重視すること	黒 - 色彩樹木画でのアンバランスさや各アイテムの大小にも注意すること
			10 先端処理を重視すること	Th.が黒 - 色彩樹木画において幹や根、枝の先端を描き手がどのように処理しているのかという点を重視すること
			11 発達の指標を重視すること	黒 - 色彩樹木画において、樹木画の発達の視点を取り入れて考察をすること
			12 プラスの部分を探すこと	アセスメントで終わるのではなく、描き手自身のポジティブな要素を見つけないというTh.としての想い
黒 - 色彩樹木画テストにおける共通理解の観点	描画についての捉え方	無彩色の作用	13 黒色彩樹木画の類似点	黒 - 色彩樹木画においてどちらの描画にも見られるパターンや共通性への注目
			14 無機質さから捉えられるパーソナリティ	鉛筆を使用することで樹木画に現れる病理性を、Th.がより直感的に感じやすくなるという利点
			15 黒樹木画で感じる無機質さ	黒色樹木画に対して無機質や形式的な印象をTh.が抱くこと
		色彩による作用	16 色彩樹木画に現れる病理性	色彩樹木画で現れる特異な表現をTh.が読み取り、アブノーマルな印象を抱くこと
			17 カラーショックについての指摘	色の存在が描き手に刺激を与えた可能性について
	2枚法だからこそ解釈		18 黒 - 色樹木画を眺めたからこそ表れるイメージ	黒色樹木画から色彩樹木画を眺めた上で、Th.が描き手のイメージや描画の解釈を指摘すること
			19 色彩樹木画でより感じられる描き手の内面	色彩樹木画に移行することで、描き手の内面がより表出される可能性について
	Th.が期待する描き手の修正描画体験	色彩導入への反応	20 自然色に目が向く	描き手なりに考えて色彩を取り入れながら、色彩樹木画にも活かしているというTh.の捉え方
			21 影響を及ぼさない色彩導入	色彩を導入したとしても、描画表現において描き手はその影響を受けず描画できているという指摘
			22 色彩のポジティブな効果	色彩を導入したことによって、描き手へのポジティブな効果をTh.が感じること
		表現のやり直しに着目する	23 描画の修正体験	樹木画でやりきれなかった部分が、色彩樹木画の導入によって表現方法が増え、描画自体への描き直しに繋がったのかもしれないというTh.の指摘
			24 不完全な幹を補おうとする動き	黒色樹木画でうまく表現できなかった幹の描写を、色彩樹木画の中であえてクローズアップし、再びやり直そうとする動き

リーだけを用いて結果を簡潔に説明したもの)を説明する(「」は概念,【】大カテゴリー,◀▶中カテゴリー,<>小カテゴリー,『』は研究協力者の語り)。

黒 - 色彩樹木画を提示し、描画を眺めていく中で得られたTh.の語りを通して、黒 - 色彩樹木画テストをTh.がどのように眺めていくのかというプロセスは次のように考えられた。

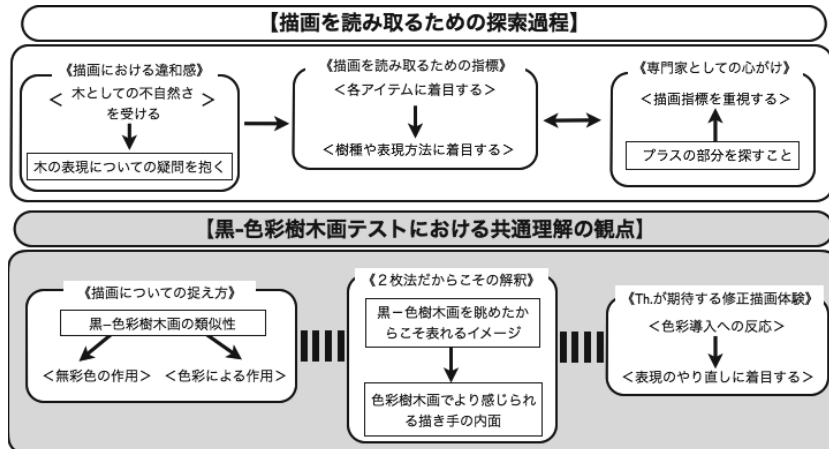


図2 黒 - 色彩樹木画テストにおける Th. の体験モデル

1. 【描画を読み取るための探索過程】

Th. が描画を眺めていく上で、まず《描画における違和感》が生じる体験から始まる。その体験において、Th. には「木としての不自然さを受ける」ことを意識することになり、具体的には「不自然な第一印象を受ける」ことや「不自然さを黒 - 色彩樹木画で捉える」動きが生じていく。例えば、『両方とも木として成立していないんじゃないかな？（Aさん）』や『やっぱり自然界にはない、木だし…、木だって言われなかったら、何かよくわかんない（Aさん）』という語りから見受けられる。さらに、Th. が描画を眺めていく中で、なぜこのような表現で各アイテムが描かれたのかという「木の表現について疑問を抱く」ことになる。そこで生じた疑問は、《描画を読み取るための指標》において、より具体的に検討されていき、Th. が「各アイテムに着目する」ことになる。描画上において Th. は「描線に着目する」、「枝に着目する」、「根に着目する」というように、特に細部へと注意が向きやすいことが窺える『全体の描線が所々、途切れて持続してないって…集中力が全部途切れて、あとちょっと重線（ママ）もけっこうありますよね（Bさん）』。さらに、「樹種や表現方法に着目する」ことで、「表現方法のワンパターンさを捉える」ことや、「樹種によって促進される連想」が促され、様々な要素が抽出されることで、描き手や描画自体についての Th. の解釈はさらに膨らみを増していく。ただし、これらの要素に注目していく一方で、《専門家としての心がけ》も重要となってくる。描画を眺める過程では、Th. が「描画指標を重視する」動きがあり、それらは「バランスを重視する」「先端処理を重視する」「発達の指標を重視する」といった要素が絡んでいく。そして、Th. にとって、前述の感覚や着目点と同じくらい重要なことは、描画において「プラスの部分を探すこと」である。この点は、『描画に、言葉にできない、その人の思いがあると思うから、じゃあなんだろう、その人の表現したかったこととか、できればポジティブなところ、あの木として不自然なんだけど、できればポジティブなところを見たいなと。（Aさん）』という語

りからも指摘できる。このような流れが、【描画を読み取るための探索過程】となり、特に《描画を読み取るための指標》と《専門家としての心がけ》は、それぞれが互いに影響を与えながら、黒 - 色彩樹木画は、Th.によって探索的に捉えられていくものと考えられる。

2. 【黒 - 色彩樹木画テストにおける共通理解の観点】から《描画についての捉え方》へ

前述の【描画を読み取るための探索過程】を巡りながら、Th.は【黒 - 色彩樹木画テストにおける共通理解の観点】がイメージされていく。この体験過程では、Th.の《描画についての捉え方》が意識されることで、Th.は黒色樹木画と色彩樹木画の中で捉えることができる「黒 - 色彩樹木画の類似点」に着目する。その後、黒色樹木画で生じる＜無彩色の作用＞を捉え、それは「黒色樹木画で感じる無機質さ」となり、「無機質さから捉えられるパーソナリティ」にも繋がっていく（『こっちの方がある種、ちょっと抽象化されていて無機質な感じを形式的な感じを受ける（Fさん）』、『枝の規則性も、なんかな、曲線がやっぱり奇妙で、で、絶対、曲線からの二股っていうのが、その…それが、6本…こんなに並ぶと…（間）…ちょっとやっぱり、強迫的っていうか…（Aさん）』）。一方で、色彩樹木画では＜色彩による作用＞について指摘され、その点から「色彩樹木画に現れる病理性」へと関心が移っていく（『まずここだけを切り出すところもそうだし。この鱗みたいな感じで覆われている、その、きちっと形を隙間なく埋められているような感じとか。（Aさん）』）。それと同時に「カラーショックについての指摘」もあり、色彩の導入が描き手にとって刺激となり、描画の表現内容にも影響を与えることが窺える（『あーそういえばこれは色鉛筆なんだって聞かされたから、多分その人が描く時には色鉛筆がいっぱい並んでたから、おそらくカラーに刺激を受けたのかなって（Bさん）』）。

3. 《2枚法だからこそその解釈》と《Th.が期待する修正描画体験》について

このように【黒 - 色彩樹木画テストにおける共通理解の観点】を取り上げる過程で、Th.は次第に《2枚法だからこそその解釈》を意識し始める。そして、従来の方法による樹木画だけではなく、色彩樹木画の導入によって「黒 - 色彩樹木画を眺めたからこそ現れるイメージ」がTh.に生じ、そのイメージは「色彩樹木画でより感じられる描き手の内面」をTh.に浮かび上がらせることにも繋がっていく。この点に関しては『1枚目でしたら。だけどまあ、実は、本当はこっち（色彩樹木画）の方が本当じゃないかというか、まだ相当ね、力があるというかね。（Dさん）』という語りからも窺える。さらに黒 - 色彩樹木画を通した描画体験過程は、《Th.が期待する修正描画体験》というような、描き手にとって表現のやり直しとなる可能性が指摘できる。そのため色彩樹木画は、描き手に対する＜色彩導入への反応＞をTh.が確認する手段となり、木を眺める過程において、Th.が「自然色に目が向く」ことは、描き手によっては「影響を及ぼさない色彩導入」ができたとしてTh.は捉えることができるかもしれない。それによって

「色彩のポジティブな効果」を Th. が実感し、このようなポジティブな色彩要因があるからこそ、〈表現のやり直しに着目する〉という動きが Th. に生じていく。この樹木画テストの描き直しという Th. のイメージには、「描画の修正体験」や「不完全な幹を補おうとする動き」が含まれており、例えば、『だからこう…目の前にこう色鉛筆で色んな世界を広がったことで、この方がもうちょっとこう…自分のやりきれなかったところをもう一度やってみようって思われたのかもしれないので、そういう意味では、なんか色んな世界が、を、(ママ) 提示してもらえたことで出せた作品かな (B さん)』という語りからも見受けられる。これらの《描画についての捉え方》や《2 枚法だからこそその解釈》が《Th. が期待する修正描画体験》が連続的に繋がっていき、それぞれが影響を与え合うことによって【黒 - 色彩樹木画テストにおける共通理解の観点】という Th. の体験過程は、より深まっていく。

V 考 察

黒 - 色彩樹木画を眺める上において、Th. は《描画を読み取るための探索過程》、《黒 - 色彩樹木画における共通理解の観点》といった、大きく 2 つのプロセスを体験していくことが考えられた。加えて、これまで述べた《黒 - 色彩樹木画における共通理解の観点》が、《描画を読み取るための探索過程》にも関わり、これらのプロセスが、Th. が描画を読み取る上での視点やイメージに影響を与えていくと推察される。

これまでのストーリーラインから、初めて描画を目の当たりにする Th. の多くは、目の前の描画がどの程度、現実の木に近いものとして描かれているのかという視点を持っていることが窺える。Th. は、まずそのように描画を直感的に眺める姿勢で樹木画と対峙していると考えられる。それによって第一印象としての不自然さを感じ、黒色樹木画と色彩樹木画の 2 枚を通した探索過程において、さらに不自然さを感じることに繋がる (概念 1, 2 参照)。そうした描画の不自然さは、次第に描画への疑問へと移行し、さらに Th. が樹木画を眺めた際に、描き手はどうしてこのような表現をしたのだろうかという描き手を意識した疑問が生じていく。こうした Th. の疑問点から樹木の細部へと向かい、描線や枝、根へと着目される。描線では筆圧の強弱やふるえ、重複線に視点が向きやすいようであり、このことは Th. が描き手が持つ心理的エネルギーを推し量ることに繋がり、高橋・高橋 (2010) では、描線について幾つかの解釈が提示されており、黒 - 色彩樹木画を解釈する際でも Th. が描線に着目することは、やはりポイントの一つであると考えられる。加えて Th. が枝や根に着目することによって、描画特徴の検討や眺めていく上での安定感をも推し量っていると考えられる。特に枝や根は、その先端がどのように処理されているのか、という点に Th. の関心が向かいやすいと推察される。例えば全体的な構成として整った木が描かれても、枝や根、幹の先端がどの程度処理されているかという細部に目を向けるというような Th. の視点は、まず描画を直観的な姿

勢で見て、そこから細部に目を向けるという傾向があると考えられる。そうすることによって、Th.が描画に抱くイメージは、抽象的なものから具体的な解釈へと落とし込む作業が行われていくと考えられる。また、どのような樹木の種類が描かれているのかという点もTh.にとって重要な視点である。例えば葉の茂みが描かれた広葉樹と、茂みの見られないブドウの木では、Th.の受け取り方も変わってくるであろうし、それらが示す解釈上の意味も異なってくると思われる。加えて、具体的な着目点とは別に、Th.が描画を眺める上で重視している指標にも留意しておく必要がある。前述した先端処理もその一例であるが、描画における発達年齢も考慮されていることを忘れてはならない。これらは幹の比率や、どれだけ写實的に描かれているかに着目し、それぞれをTh.は捉えていると考えられる。ただし、こうした着目点や指標を重視しつつも、Th.はこれを決して機械的に行っているわけではない。描画を眺める際には、常に描き手が持つポジティブな要素を探しながら見つめることが、専門家として最も重要な心がけであると言える(概念12参照)。この視点から眺めていくことも、描画療法・描画テストを眺める際にTh.に求められる姿勢の一つとなるだろう。

さらに、黒-色彩樹木画テストを眺める過程では、Th.はそれぞれの描画に共通している点に目を向けていくことが指摘できる(概念13参照)。この共通性に目を向けるからこそ、黒色樹木画と色彩樹木画との差異が際立ち、それぞれが持つ効果にTh.は着目することができる。黒色樹木画においては、鉛筆という一本の表現道具で描かれることで、Th.が描画そのものを捉えやすくなると考えられる。鉛筆という誤魔化しの効きにくい表現道具を使用することによって、通常は見えにくい描き手の内面を浮かび上がらせることになると思われる。そのためTh.の直感は、黒色樹木画においてより発揮されやすく、それに伴って描き手が持つ病理やパーソナリティを捉えることに繋がるのではないかと推察される(概念14参照)。一方、色彩樹木画においては、色の持つ刺激にTh.は注目している。黒色樹木画の後に、色彩樹木画に移行することは、描き手に何らかの揺さぶりを与えることが予測される。そして、その揺さぶりに対して描き手自身がどう対処するのかというのも、描き手の心理的状況やストレス耐性をアセスメントするために有効な着目点であると推察される。またロールシャッハ・テストでは、反応決定因としての色彩反応は、情緒的な統制の指標とされており(片口, 1987)、カラーショックによって、被検者の情緒の安定性を図ることができることを述べている。したがって色彩樹木画を導入することによって、色彩導入にどう反応したかという側面に目を向けることが可能になるかもしれない。

黒-色彩樹木画テストを眺めていくと、2枚法だからこそその視点がTh.によって抽出されることとなる。そこには色彩樹木画の導入について、黒色樹木画だけでは見えなかった描き手の内面だけでなく、導入したことで得られる肯定的な理解の側面をTh.が読み取っていることも含まれる(概念18, 19参照)。例えば、色彩導入において、自然色(緑や茶色など)の使用が可能かどうかは、描き手の現実検討力を見定めるためのポイントとなることが本研究の調査協

力者である Th. によって指摘されている。名島 (1999) が、色彩樹木画に見られる逸脱型を「紫色の葉や幹、ピンクの幹といった具合に、自然な色の使い方から外れた色彩が用いられているものである。このような色彩バウムは、筆者の経験からすれば、被検者が思考障害を有していることが多い」と述べている点からも、描き手が色を適切に使えない場合は何らかの支障をきたしている可能性が高い。そのため樹木画に自然色が使われている場合、全体的構成や他のサインとの関連にも留意する必要があるものの、描き手にはある程度現実を適切に捉える力があるということが推察できる。加えて、2枚描くという点も描き手によっては肯定的な側面の理解となる。黒色樹木画で生じるかもしれない「うまく表現できなかった」という描き手の感覚は、色彩樹木画に移行していくことで、再び描けるのだという「やり直し体験」とも繋がると考えられるからである (概念 23 参照)。描き手が描画をやり直せるということは、それだけ現実に関与する力を持っていると Th. は判断できるかもしれない。また不完全なものを補おうとする被検者の動きは、アセスメントだけでなく治療的な意味合いを含む可能性もある。藤掛 (2007) は、1枚目の描画を発展させる目的で意図的に描き直してもらう介入的アプローチでは、「描きなおしたり、描き加えたりする行為は、与えられた世界であるところの画面を変え、また書き換えることを意味し、描き手に自分は再出発できるのだ、やり直せるのだという感覚を味わうことが促される」と述べている。こうした側面は黒 - 色彩樹木画においても指摘でき、上記のように色彩樹木画を描くことは、描き手にとって「描画の再出発」の体験となる可能性が考えられる。

なお、名島 (1999) が黒 - 色彩樹木画テストにおいて「2枚のバウムはそれぞれ単独でも解釈できないことはないが、やはり2枚を比較検討することがきわめて重要である」という指摘について、筆者はさらに考察を進めてみたい。2枚を比較検討することと同様、あるいはそれ以上に、まず黒色樹木画と色彩樹木画を2枚並べて眺める過程が大切であることが挙げられる。これは描かれた2枚の描画を、まずは一緒に味わうという過程を指しており、その過程を経て、Th. は初めて比較検討を行うことができると考えられる。描画テストにおける2枚法は、その性質上、どうしても差異について目を向けられやすいが、比較や差異に重点を置しまうと、2枚法を使う意義が大きく失われる危険性がある。このことは描画を別々に見た場合、変化のあるなしという2極化された物差しで黒 - 色彩樹木画テストを捉えてしまう可能性が考えられるからである。この点は村瀬 (2007) が、描画は「表現するにはきわめて自由度が高く、(読み手が) 類型化して捉えることによって、理解の枠組みからこぼれ落ちる要素がある」と述べていることと同様であると考えられる。また青木 (1980) も、描画テストにおける実践経験を長く持つ者は短い者よりも正しい判断をしやすいが、未熟練者はまちがった、あてにならない「思い込み」をしやすいと述べており、高橋・高橋 (2010) も、描画テストの初心者は描画を分析しすぎて、文献や論文に書かれたことをそのまま意識して解釈しようすることを述べている。そのため描画法において、前述の2極化的に捉えてしまうことは、それこそ初心者が陥っ

てしまう捉え方であり、主観的かつ極端な解釈へ繋がってしまうのかもしれない。このように2枚法を使うことが、危うく意味のない手法とならないように、ひとまず黒-色彩樹木画テストを2枚並べて味わいながら眺めるという姿勢を持つことが重要であろう。したがって2枚の差異も見つつ、ある程度の共通性も捉えた上で、Th.は描画の細部に注目していく視点が必要になると考えられる。

本研究では、黒-色彩樹木画テストによるTh.の主観的体験について検討を行った。今後は、調査対象に初学者の視点を含めることや、健常群や他の臨床群の描画データを用いることで黒-色彩樹木画テストの理解をさらに深める検討を行うことが必要と考えられる。加えて、本調査で使用した描画は統合失調症者が描いたものであり、本調査で得られた結果を健常群やその他の精神疾患の臨床群のデータに当てはめることはできない。また、今回得られた視点はあくまで、描画法を用いる心理臨床家の着目点の一つのモデルであり、今後は、その他の技法を用いる心理臨床家のクライアント理解にも応用できる視点を研究していきたいと考える。

〔引用文献〕

- 青木健次 (1980). 描画法における全体的印象について. 京都大学教育学部紀要 **26**, 129-140
- Bolander, K (1977). Assessing personality Through Tree Drawing. 高橋依子 (訳) (1999) 樹木画によるパーソナリティの理解. ナカニシヤ出版
- 藤掛明 (2007). 描画における相互作用性——セラピストとクライアントの関係をめぐって. 臨床心理学, **7**, 181-187. 金剛出版
- 藤中隆久 (2008). バウムテストを使用した二つの事例研究. 心理臨床学研究, **26**, 184-192
- 角野善宏 (2004). 描画療法から見たところの世界——統合失調症の事例を中心に. 日本評論社
- 片口安史 (1987). 新・心理診断法. 金子書房
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法. 弘文堂
- Koch, K. (1957). Der Baumtest 3: der Baumzeichen versuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト第3版——心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房
- 近藤孝司 (2011). 描画法の描画過程と描画体験に関する一考察. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **11**, 29-42
- 近藤孝司 (2012). S-HTPP 法にみられる全体的印象の性差. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **11**, 13-22
- 近藤孝司 (2012). 描き手が自身の描画を振り返ることの心理臨床学的意義——約2年, 4枚のS-HTPP法を用いた2つの事例研究. 心理臨床学研究, **30**, 309-320
- 近藤孝司 (2016). 描画法の描画過程における主観的体験の検討. 上越教育大学研究紀要, **35**, 135-146
- 村瀬嘉代子 (2007). 描画を受け取るということ. 臨床心理学, **7**, 金剛出版, 174-180
- 村田敏晴・村田陽子・名島潤慈 (2001). 黒色バウムと色彩バウムの比較——描画の順序効果とバウム内容の検討. 山口大学心理臨床研究, **1**, 23-27
- 中井久夫 (1985). 中井久夫著作集2巻——精神医学の経験: 治療. 岩崎学術出版社
- 中園正身 (1996). ——変法としての樹木画法の研究——根を強調した教示法の導入について. 心理臨床学研究, **14**, 197-206

- 名島潤慈・増田勝幸（1993）．バウム・テスト．上里一郎監修，心理テストハンドブック．西村書店
- 名島潤慈（1996）．黒－色彩バウム二枚法の意義．熊本大学教育学部紀要人文科学，**45**，271-281
- 名島潤慈（1998）．色彩バウムテストと抑うつ状態との関連性．熊本大学教育実践研究，**15**，1-5
- 名島潤慈（1999）．黒－色彩バウムテストの解釈．熊本大学教育実践研究，**16**，61-65
- 野口康彦・和田朱音（2016）．「水と私」描画における心理的体験：描画後の対話を中心に．茨城大学人文学部紀要，人文コミュニケーション学科論集，**20**，121-133
- 大石幸二・成瀬雄一（2012）．描画における臨床心理学的効果に関する展望——描画行為に内在する身体的拡張感の検討——．人間関係学研究，**18**，51-59
- 高橋雅春・高橋依子（2010）．樹木画テスト．北大路書房
- 植田愛美（2013）．統合失調症における描画についての研究——黒－色彩樹木画テストを用いた基礎的研究——．大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科修士論文（未公刊）
- 渡部洋・土屋隆祐（1995）．樹木画の印象的評価の特徴について．東京大学教育学部紀要，**34**，195-205

（う えだ まなみ 教育学研究科臨床心理学専攻博士後期課程）

（指導教員：松瀬 喜治 教授）

2017年10月2日受理